

5. 縄文の石器

このころは土器と共に石器がたくさん使われています。ただ打ち欠いて作られたものを打製石器、磨かれて作られたものを磨製石器といいますが、その用途によって多種多様な石器があります。

直接的な利器としては石鏃があります。矢じりと呼ばれるものですが、大雨の後畑に出ると表面に黒光りして子どものころよく拾い集めたものです。また、土掘り具として打製石斧があります。それは、植物の根や竪穴式住居を造る時の道具として使われていました。また、よく磨いて作られた磨製石斧がありますが、伐採用など木材の加工具として形や大きさの異なるものがあります。

二次的な加工具としては石匙があります。つまみがついて木の柄を着け皮はぎや肉切りなどに使われています。その他には穴あけの石錐（石きり）、脂肪分をかき取るスクレイパーなどがあります。

二次的な石器として磨製石斧を研磨したと思われる砥石、装身具を研磨したと思われる幾筋もの溝を残す玉砥石、植物性の食料をすりつぶして製粉用とした石皿と磨石があります。また特殊な石器として、クルミやドングリの殻を割るか、発火具としての引きぎり式のハンドピースとも考えられる凹石が出土しています。しかし、この遺跡では数個を数えるのみで磨石の多いのに比べて凹石の少ないことはその用途について認め

いたメッセージを秘めているように思えてなりません。

石器の材料は打製石斧の安山岩を除いて石鏃、石匙、石錐など黒曜石が主体になっています。他に、アルプス産のチャートや頁岩が使用されています。黒曜石は岩漿（マグマ）が急に冷えて凝固してできた天然ガラスで、その鋭利さを得て既に旧石器時代から石器の材料として使用されていました。原産地は和田峠（下諏訪）です。

この遺跡で特に注目する石器として装身具があります。縄文前期後半の縄文期の珠状耳飾りが数点出土しています。

白馬岳原産の滑石であるかどうか石質の分析をしなければはっきりしませんが、前記の玉砥石と併せて考えると、ここは玉づくりとしての性格をもった遺跡ともいえそうです。

さらに特筆すべきことは、ヒスイの大珠と琥珀が出土したことです。県内での縄文ヒスイの出土例は五十数カ所にのぼりますが、同時に出土した例はわずかに梨久保遺跡（岡谷）に1例しかありません。琥珀の産地は千葉県銕子市付近にあります。ヒスイは長野県小滝川・富山県新川郡朝日村にあります。このヒスイと琥珀とは2つの対立する文化圏を有するといわれています。ここ八幡原遺跡は関東と北陸文化の接点として重要な意味をもつものと考えられます。



石鏃と石匙



凹石

磨製石斧と打製石斧



玉砥石と石皿、磨石



滑石製珠状耳飾りとヒスイの大珠

II. 歴史のあらまし

1. 奈良・平安時代

奈良時代に国・郡が定められ、犀川の東岸は大休池沢を境にして南は筑摩郡に、北は更科郡に含まれ、西岸は安曇郡に含まれていたようです。

下生坂八幡原遺跡では平安時代の住居跡が発掘されています。京都から越後へ向かう東山道の支道は四賀村～本城村～麻績村を通過していましたが、犀川ペリの

道も裏街道として古い道でした。生坂、古坂という地名はいくつもある坂道、古い峠道などから出た地名です。

927年にできた「延喜式」には日置神社が載っています。現在上生坂と日岐に日置神社があります。どちらも明治になってから改称した社名ですが、古い歴史のある神社です。



上生坂の日置神社



日岐の日置神社

2. 鎌倉時代

鎌倉時代から犀川東側の上生坂や下生坂は筑北方面と共に筑摩郡に変わりました。麻績や会田に伊勢神宮の荘園（みくりや）ができ、神明宮が小立野・上生坂・下生坂・込地・草尾・大日向・宇留賀・古坂などにできたようです。

照明寺は寺伝によると建長3年（1251）に明科町金井沢にある大穴山泉福寺の第3世弘阿の開山といわれる真言宗の古い寺で、古くは日置神社の神宮寺として日置神社の下段にあったともいわれています。

小立野の乳房イチョウの樹齢はおよそ800年といわれますから、乳房堂もこのころできたのかも知れません。

宇留賀の才光寺には八坂村覺首寺の坊があったといわれ、鎌倉末期か室町初期と思われる松本地方としても立派な五輪塔があります。そのころ宇留賀氏が町町の仁科氏から分かれて出て来たと考えられます。



樹齢約800年の
乳房イチョウ
周囲8.3m



才光寺の五輪塔
高さ115cm

3. 室町時代

建武元年（1334）ごろ信濃の守護になった小笠原貞宗は、居館を伊那の松尾から松本の南の井川城へ移して信濃を支配しました。その後、信濃の守護になった小笠原長秀は、応永7年（1400）威信を示すために大行列で善光寺へ入りましたが、課税課役に反感を持った村上、仁科、海野、その他の信濃の武将は篠ノ井の大塔で長秀の軍を打ち破り京都へ敗走させました。この時大日向氏、宇留賀氏が参戦しています。その後大日向氏は水内郡の小川へ移り大日向方を称しています。

宇留賀の会の墓地には正長元年（1428）と嘉吉3年（1443）の年号と歳之廻・盛重の銘を刻んだ宝篋印塔（お経を納めた供養塔の形をした石塔）があります。宇留賀氏、牛越氏関係のものと考えられますが松本地

方では一番古い年号のある宝篋印塔です。

上生坂の日置神社には、松本地方では2番目に古い享徳元年（1452）に神明宮の社を造立した棟札があります。領主は藤原朝臣沙弥宣光となっていますが、仁科氏であるか丸山氏であるかはわかりません。

才光寺の毘沙門堂には室町時代末期と思われる毘沙門天立像があります。これは宇留賀氏の居館のあった本村から移したものです。

草尾の毘沙門堂にもかなり古い小像の毘沙門天と室町時代の毘沙門天立像があります。毘沙門天は守護の神として後には福德の神として武士や農民に信仰されました。



◀日置神社の棟札
右 享徳元年(1452)
中 寛永17年(1640)
左 寛文10年(1670)



会の宝篋印塔、右は不完全



草尾の毘沙門天



才光寺の毘沙門天

4. 戦国時代

室町時代の後半に起きた応仁の乱（1467）から後の戦争で乱れた100余年間を戦国時代といいます。各地で武將たちが領地を奪い合いました。

大日向氏は水内郡の小川の方へ去り、丸山（日岐）氏が大町の仁科氏から分かれて生坂谷へ出てきました。いつごろ生坂へ出てきたかははっきりしませんが、明応

3年（1494）以前だろうといわれています。

厚川の東側にいた武將は丸山氏を、西側の日岐にいた武將は日岐氏を名乗りました。丸山氏と日岐氏は兄弟です。日岐氏は明応3年、裏日岐に菩提寺として正福寺を建てたり、広津の平出の成就院を中興したと伝えられています。

数多く残る山城跡や居館跡

武田氏が信濃へ攻め込み始めた天文8年（1539）ごろになると、今まで平地や山麓に居館を構えていた武將たちは危険を感じて高い山上に城を築きました。現在も次のような山城や居館跡があって空堀・石垣・土塁・くるわなどが残っている所があります。

小立野 中野山城 小迫城 高松薬師城 中がいと
町屋敷 古屋敷
下生野 中がいと
上生坂 こや城 殿村 万平 丸山の殿屋敷 関屋
下生坂 大城 塩が城 源蔵屋敷 城ノ原
日岐 日岐城 殿屋敷
草尾 長谷久保の中山城
大日向 高津屋城 内城 城坂屋敷 高見屋敷
宇留賀 宇留賀城 金戸山城 こや 古屋敷

天文18年（1549）塩尻峠の合戦で小笠原氏を破った武田晴信は松本平へ攻め込みました。小立野に居館や山城を持っていた丸山政友は翌年松本の南方で武田の軍と戦って討ち死にしました。



宇留賀城（中央モトの空堀3条、くるわ、本丸に石垣や土塁がある）



日岐城。空堀が3条と本丸には石垣や供養塔がある。



正福寺墓地の日岐氏の墓。古い宝篋印塔や五輪塔で、完全なもの少ない。



中がいと居館跡と中野山城。中がいとには東南北の三方に堀の跡がある。中野山城には空堀とくずれた石垣が残る。

武田氏が生坂方面を攻めた確実な資料はありませんが、そのころ大町の仁科氏も降参していますから、丸山・日岐・宇留賀氏も降参したり逃げた模様です。伝承では日岐や万平は戦場になったと言われ、降参備前の守が武田氏より日岐6郷（上生野・小立野・下生野・上生坂・下生坂・日岐の6か村）を賜ったと1724年に松本藩で出版した「信府統記」に書いてあります。

その後度々川中島の合戦がありましたが、この時生坂の人々の中には武士や軍夫として駆り出された者もいたらしく、古い本家筋の家には武田信玄のにせ感状が残っています。

武田氏が松本地方を支配していた30年間は比較的平和でしたが、天正10年（1582）武田氏が滅び、逃げていた小笠原貞慶が入って来て深志城を松本城と改め、周囲の武将たちを征服するようになるもまた世の中は乱れました。

小笠原貞慶が日岐城や大城を攻める

天正10年（11年という説もある）8月、小笠原氏は



万平から見た大城の遠景 標高980m仁科の山城中第一の要害城。くるわが3カ所ある。



万平の松並木 元禄4年史跡と防風林を兼ねて植えた。

三方から日岐大城・万平・を攻め、9月にはほとり橋や広津の平出方面から攻略しました。

兄の日岐（丸山）盛直は上杉氏が支配していた川中島方面へ逃げました。

弟の盛武は小笠原氏に降参し忠節を尽くしたので、翌年日岐6郷のほか、押野・北山・日岐山大穴・堀ノ内（池田）・吉野（豊科）・一日場（三郷）の地の内230貫文（約60町歩）を与えられました。

天正12年には小笠原氏は下生坂の眠峠を越えて麻績城を攻略したので、この時も生坂の人々は軍夫に駆り出されて大変だったと思われます。

天正18年（1590）小笠原氏は下総（千葉県）の古河に移り、石川数正が8万石で松本城主になり、差出検地（田畑調査）が行われ石高（米のとれ高、畑は米に換算）は日岐ノ郷は353石、日岐峯方村134石、草尾村49石、大日向村205石、宇留賀村91石、北山村106石でした。



源藏屋敷 下生坂の山崎沢と樋ノ口沢の間の台地。大城の真下で丸山氏が戦時に籠を構えた所と思われる。1ha余。



万平の旗攻跡 旗を何本も立てて敵をいかくした。

5. 江戸時代

歴代の領主

1603年徳川家康が江戸に幕府を開いてからを江戸時代といいます。筑摩・安曇地方は大体松本領主の支配下にありました。歴代の松本領主は次の通りです。

石川氏	1590年より2代23年	8万石
再び小笠原氏	1613年より2代4年	8万石
戸田氏	1617年より2代17年	7万石
松平氏	1633年より1代5年	7万石
堀田氏	1638年より1代4年	7万石
水野氏	1642年より6代84年	7万石
幕府代官	1725年より1年	7万石
戸田氏	1726年より9代145年	6万石

享保10年(1725)水野忠恒は江戸城で刀を抜いたため改易となり松本領は幕府領となりましたが、翌年戸田氏が6万石で松本へ入城したので、川手・会田・筑北・塩尻方面の1万石は幕府領となり、他は松本領でした。

生坂では原川の西側は今まで通り松本領で、東側は幕府領となったので、東側の百姓はご天領だぞと言っ

村の発生

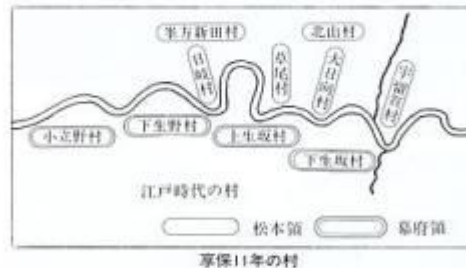
1. 天正18年(1590)石川氏の時代に現生坂村の郷村名には日岐ノ郷、日岐峯方村、草尾村、大日向村、宇留賀村、北山村がありました。
2. 寛永5年(1628)ごろ戸田氏の時代には日岐ノ郷が分かれて、上生野村(現明科町分)、小立野村、下生野村、上生坂村、下生坂村となり、日岐峯方村は分かれて日岐村、峯方新田村となりました。
3. 川西の方は前から池田組へ属していました。川東の方は前は麻績組へ属していましたが、享保11年(1726)幕府領になった時から川手組となりました。これらの村名は明治7年まで続きました。

村の役人

松本藩の政治組織の中には村を治める役人として郡奉行、代官、手代、同心などがいて村役人を指図していましたが、村内には村方三役と呼ばれる庄屋、組頭、長百姓がありました。

1. 庄屋 はじめは肝煎と呼ばれています。幕府領では名主といいます。今の村長で警察の仕事もします。
2. 組頭 今の助役です。大きな村には2-3人いま

ていばっていましたが、各地の代官所で支配するため都合が悪かったので、天明5年(1785)から松本藩の預り地となりました。



3. 長百姓 幕府領では百姓代といって農民の代表で庄屋、組頭の監査役です。今の村会議長ともいえます。
 4. 大庄屋 古くは割元役、組手代といわれ租を統轄するための領主の出先の役人といえるもので領主が任命しました。
- 郡奉行——組代官——手代、同心
○ 大庄屋——庄屋——組頭——長百姓

五人組制度

徳川幕府は農村支配の一つの方法として、隣近所の五軒を一組として五人組頭を置き、切支并宗門の禁止など法令を守ること、年貢の完納、治安維持などの連帯責任や相互扶助を義務づけました。

宗門改帳・家数・人数

徳川幕府は寛永15年（1638）九州島原で起きたキリシタン（キリスト教信者）農民一揆に懲りて、キリスト教を厳禁するため、すべての人々をお寺の檀家にさせ、毎年宗門改めを行い宗門改帳（戸籍）を作って領主に提出させました。宗門改帳により村々の家数や人数などを知ることができます。（表1）

検地

領主は年貢を取るため度々田畑を検査し、田畑別・面積等級・収穫高・耕作者などを調べ検地帳（土地台帳）を作りました。

慶安3～5年（1650～52）水野氏が行った領内総検地は百姓の体制を確立させたものとして有名です。その時生取の状態は表2の通りです。



五人組帳



宗門改帳の一部

表1

年(西暦)	1720	1808	1736	1855
村名	家数	人数	家数	人数
小立野	56	438	107	539
下生野	46	368	78	460
上生坂	89	611	146	774
下生坂	79	451	108	526
日岐			56	368
峯方新田			32	300
草尾			28	247
大日向			57	600
宇留賀			57	532
北山			143	1,416

表2

村名	田	畑	石高	屋敷	天保3年 1832年の石高
小立野	0.2町	51.6町	127石	33軒	159石
下生野	0.2	40.9	161	24	170
上生坂	5	78.2	414	44	470
下生坂	2.4	47.7	276	37	296
日岐	0.1	78.9	206	38	210
峯方新田	0.5	61.2	135	26	141
草尾	0.1	24.0	134	21	144
大日向	0.7	77.7	401	59	405
宇留賀	1.8	63.9	231	38	241
北山	4.3	132.1	397	64	435

種類の多かった年貢

年貢は主として米で、生産高の約半分を納めました。米以外にも次のような雑税がありました。

大小豆 ひえ 油え 野山 山椒 檜 紙 漆
栗 あんにん 漆桶 いはた 真綿 新馬薬・こめ
か 大工 木挽 鍛冶 紺屋 水車 人夫賃 江戸の
費用等。年貢は現物納めは少して大部分は金納でした。
換金作物としては煙草・麻があり、宇留賀は紙の集
産地でした。



年貢の割附の一部



漆塗のあと

6. 明治以後

- 明治1年2月 幕府領の旧生坂方面は塩尻取締所管轄
 2. 6 松本藩は版籍奉還する。旧生坂方面は伊那県管轄となる
 3. 9 平民も名字をつけることが許される
 4. 7 麻藩置県で、陸奥広津方面は松本県となる
 11 伊那・松本県廃止、筑摩県となる
 5. 3 行政区画が行われ各区に戸長を置く
 5 各村、戸籍を新しく作る
 8 各村、地租改正に着手、名主・組頭を廃止し、戸長・副戸長を任命する
 6 各村寺堂を利用して学校を開く
 税金を地租で納めるようになる
 7 初めて徴兵検査が行われる
 8. 1 小立野・下生野・上生坂・下生坂村が合併して生坂村となる
 2 中村・小泉・寺・日岐・白駒・草尾の6か村合併して陸郷村となる
 大日向・宇留賀・北山村が合併して広

津村となる

- 各村戸長宅へ戸長役場を置く
 9. 8 筑摩県を廃止し長野県となる
 9 南会に警察電署が設けられる
 12. 1 筑摩郡が東西に安曇郡が南北に分かれる
 22. 4 市町村制を実施、村長・村役場となる
 38 煙草製造専売制となる
 41. 4 義務教育6カ年、陸郷や広津の学校統合
 42 神社合併が行われ、小社は集められる
 大正3 生坂村連合青年団、生坂村婦人会創立
 5. 9 上生坂に電灯が初めて点灯
 7. 1 生坂村役場庁舎竣工移転
 12. 1 御成婚記念の旅行列、提灯行列をする
 昭和3・11 生坂小学校へ父兄会の寄付でラジオ入る
 10 陸郷村役場、八丁橋の所へ移転新築
 11. 1 消防組統合して生坂村消防組となる
 16. 4 小学校を国民学校と改称する
 22. 4 新学制発足、小中学校できる
 32. 3 町村合併により新生「生坂村」誕生する



明治8年2月 陸郷村発足の布達



I. 総務

昔人の築いた誇りある基盤の上に新しい創造を重ね、うるおいと活力に満ちた人間性豊かな村づくりを目指しています。

1. 住みよい郷土の基盤づくり

土地の有効利用を図りながら集落の整備、治水・治水と、水道の整備に努めています。

2. 健康で明るい村づくり

児童・老人・障害者・低所得者のそれぞれの福祉を進めるとともに、保健衛生、消防防災、交通安全の推進に努めています。



村づくりを相談する村長と収入役

意欲的な村づくり

3. 文教向上と活気に満ちた村づくり

学校教育の充実と、高齢化社会を迎えてスポーツを含めた生涯学習の推進、また心豊かな人間社会の醸成からも芸術文化の振興に努めています。

4. 豊かなくらしの村づくり

農林業、商工業を含めた産業の振興を図り、都市との交流を考え観光による村の活性化に努めています。

5. 住民参加の行財政運営

限られた財政の中で最大の効果を上げるとともに、住民参加の開かれた行財政運営に努めています。



役場内風景



中学生も傍聴する村議会

1989年の生坂村基本指標（4月1日）

標高（役場）	519m
面積	39.25km ²
世帯	860世帯
総人口	2,890人
男/女	1,409人/1,481人
就業構造	(昭和60年)
第1次産業就業者数	423人
第2 " "	826人
第3 " "	493人
有権者総数	2,312人（9月1日）
男/女	1,111人/1,201人

村会議員数	12人	〈財政〉	
村職員数	50人	歳入総額（昭和63年度）	14億6,947万円
消防団員数	180人	うち村税（ " ）	1億9,142万円
産業	(昭和60年)	歳出総額（ " ）	14億4,835万円
経営耕地面積	222ha	保育園数/園児数	2園/68人
農家数/専業農家	615/92戸	小学校/学級/児童数	6学級/141人
農業概生産額	4億8,200万円	中学校/学級/児童数	4学級/89人
工場数/従業員数	13社/221人	病院一般診療所数	2院
製造品出荷額	25億5,700万円	医師・保健婦数	3人
商店数/従業員数	39店/79人	簡易水道普及率	99.6%
商品販売額	9億4,040万円	自家用自動車保有台数	1,960台



遅ればせながら、全国で大ブームになっている太鼓が生坂でも出陣上がりました。その名も「生坂龍 翔太鼓」です。



▲安曇野一帯に伝わる昔謡小太郎、翠組小太郎。

打ち砕かれた場所は生坂村の山清路です。

山清路をPRしようと商工会を中心に翠組小太郎祭りが始まりました。



たんぼのあぜ道、うらびれた堂…歩いて見るといろんな発見が。

村を知ることがまず大切なのです。

(子どものための公民館のワークララーで)



◀山の豊産がぶどうの畑に生まれ変わりました。

巨峰を中心に栽培され、「山清路巨峰」の銘柄で出荷しています。糖度も高く、市場で高く評価されています。



村の産物をPRしようと、観光協会・商工会などにより多くの県内外の物産展に参加するようになりました。主に、わら細工・おやき・漬物などです。



村内でとれた農作物をおいしく食べようと加工施設が造られました。豆腐やジュースなど大好評です。